

私の歩んだ道

——一冊の本に触発されて——

増田廣實

(一)

一九三〇年長野県に生まれた私は、旧制中学三年生の八月太平洋戦争の敗戦を迎えた。

敗戦の混乱の中で、何かホッとする安堵感と共に急激に自由が押寄せてきた。正に昨日に変わる世の中の変貌ぶりは、中学生の目にもハッキリと見え、一度に全ての物が輝きだしたように思われる日々がやってきた。そんな自由さの中で、戦時中に想像も出来なかった新しい思想や学問が一斉に起り、私たち身の回りに溢れかえった。そんな自由な空気の私を把えた学問は、生物学であり、進化論や遺伝学への興味にダーウィンやメンデルへの強い憧れを抱いて、彼等の伝記や業績を夢中で追い馳けた。

特に遺伝学に強く惹かれたのは、敗戦の混乱の中、私たちの中学校へ新たに迎えた千野光茂校長が、京都大学から赴任した。先生は、シヨウジョウバエを使った遺伝学の権威として知られており、私た

ち中学の先輩でもあった。先輩と言えば、後に国立遺伝研究所々長となった篠遠喜人先生も、当時すでに高名であったから、私も遺伝学者になろうなど夢想するようになっていた。

当時の自分を思い出すと、何やら小生意気な「遺伝学少年」を気取っていたものでした。たしかその頃北隆館から『遺伝』というタイトルの雑誌が創刊され、早速創刊号から購入して読みかじったものでした。この雑誌は今でも発刊が続いており、時して見かけると大変懐しく当時を思い出す。出版社こそ北隆館ではなく、裳華書房に変わったが、半世紀を越えての継続は、やはり並の雑誌ではない専門性が支えとなっているのであろう。

その頃生物の試験で「進化とは」と問われて、「進化は退化をともなう」などと、自説を力説した。また三倍体の種なし西瓜を作ろうとして、ジベレリン（植物ホルモン）を雌しべにつける実験をして失敗をするなど、そんな実験少年でもあった。そんな知識は、たしかこれも「遺伝」から得たもので、現在種なしブドウは、ブドウ

の開花時にジベレリン液の入ったコップで、一房ごと下から浸す方法がとられて実用化されている。でも西瓜では行われていないところを見ると、失敗したのは私だけではないだろう。

此頃は聞かないが、五〇年代頃「種なし西瓜」が店頭を賑わした時期があった。この方法は、西瓜の種をジベレリンに浸し、三倍体の種にし、これを播くものであった。三倍体の「種なし西瓜の種」は結実しないので、出来た西瓜は種なしとなる。しかし、種なしの種とは、何やら奇妙な感じがする。

何はともあれ、将来は遺伝学の研究者になりたいというのが、夢であり、進学もそのための学校を決めて実験出願もしたのであった。その決心は固く、一九四八年旧制中学から新制高校への学制改革の年であったから、中学五年で受験に失敗したら高三に残って、再挑戦すると心に決めていた。しかし、敗戦後の混乱の中で、身辺に様々な事が起り、心ならずもその年に、第二志望校に進学することとなる。そこで出会った日本古代史を専門とする先生の影響を受け、遺伝学から歴史学への夢は、事もなげに大転換してしまつた。

今になって考えてみても、真に不思議としか言いようもない転換であつた。気まぐれと言うか、底が浅いと言うか、また柔軟と言うか、若さ故なのであろうか、それが一生の方向を決定付けることとなつたことは、間違いない。

(一)

戦後の歴史学は、戦前の歴史学——特に日本は天皇を中心とするすぐれた国であるとする『皇国史観』を打破り、新しい国民的歴史観を打立てようとして、活潑に活動していた。新しい歴史観を打立

てるため幾つかのキーワードがあつた。それは①史実にもつき集められた素材を分析し構成する②実証的・科学的歴史学研究であること、③その研究対象も、歴史の主體的担い手としての民衆を中核とすることをもって、新しい歴史観の樹立を図るものであつた。

日本の太平洋戦争とその敗戦の悲劇を生んだ根元を、天皇制に求める時、天皇制の問題は、必然的に明治維新Ⅱ王政復古の研究を生んでいった。そうした歴史学研究の状況の中で遠山茂樹『明治維新』（岩波全書）が出版され大きな影響を受けた。（最近岩波現代文庫の一冊として復刊されている）一九五一年当時、明治維新史研究は羽仁五郎・井上清などの人々が遠山茂樹と共にリードしていた時期であつたが、この一冊の出版は、明治維新史研究の金字塔の意味を持つた。

遠山先生には、その後大学院で講義を受けさせて頂き、御面識を得て御指導を得ることとなつたが、先ずは『明治維新』を丹念に読むことから始めた。大変に註の多い論文で、内容も極めて高い著書であつたから、大学三年の学力では充分な理解が困難であつた。そこでこれまた丸山国雄先生を煩わして、ゼミのテキストとして使つて下さるようお願いしたのであつた。

丸山先生は、戦後文部省が作つた最初の歴史教科書『くにのあゆみ』の実質的編集者として、大変な労苦をなされ、御自身も明治維新史の第一級の研究者として、多くの著作をなさつていた。それはばかりか、文部省当時その配下にいたのが遠山先生であり、文部省を退官後は、『くにのあゆみ』批判の一方の旗頭が遠山先生と言うこともあり、一時は丸山先生は『明治維新』をテキストとすることに反対なさつた。しかし、私たち学生の懇願に負けて、テキストとし

ての使用を許された。

このゼミは素晴しかった。テキストは半世紀の今日なお復刊されるほどの名著であり、御指導下さるのは、明治維新の研究者としてその史実に精しい第一級の方であって見れば、学生の得る所は多く、真に「目から鱗の落ちる思い」を重ね、学問の厳しさの一端に触れることができたのである。

遠山先生の明治維新論の特色の第一は、明治維新时期を天保期（一八三〇代）に始まり、明治一〇年（一八七七）西南戦争の終結で終るとしていることである。その第二は、この政治変革の過程を、明治絶対主義天皇制創出として捉え、変革の目的を幕藩体制に代る近代的国家体制を築き、欧米近代諸国による植民地化を防ぐことにあったとした。そして、第三はその変革の主体——担い手を、下級武士——志士とそれを支えた民衆とした点であった。

この遠山茂樹『明治維新』をテキストとして使用したことで、明治維新への関心が深まる中で、卒業論文のテーマ設定の時期を迎えていた。この頃の大学では卒業論文を課さない所もある程であるが、その頃は卒業論文は四年間の学業の集大成として重視されていた。卒業要件単位一二四単位中六単位が卒業論文であり、それは他の単位と異り、学生自身の英知の結晶として、乏しい頭脳から絞り出し、諸先生の厳しい審査に曝されるものであった。そのため、学生たちは、三年に入るとそれぞれテーマを定め、卒業期の正月頃には、その提出が義務付けられていた。

この卒業論文のテーマとして、明治維新の始期に関する事項について書くことを思いついたのは、『明治維新』第一章天保期の意義の冒頭の次の書き出しにあった。

「明治維新の成就に先立つ三〇年、一九世紀三、四〇年代の政治過程の中に、すでに明治維新の政治的本質の原型が形成されていたということが出来る。」としていることであった。その「原型」がどのようにして形成されるのかという問題が、心を強く促えた。そこで言う「一九世紀三、四〇年代」とは、年号では天保期であり、天保期を特色付けているものは、飢饉と百姓一揆・都市打こわし、その対応としての水野忠邦の天保改革に至る政治過程に他ならない。「原型」を求めするためには、これら特質的事項の究明こそ必要であろうと考えたのであった。

天保改革を促す直接のきっかけとして、『明治維新』では、この時期の百姓一揆の昂揚をあげる。黒正巖「百姓一揆年表」によって、天保期一四年間の一揆発生件数の年平均が一・二一件であり、それは、天保期以前の二倍である。「特に天保七年（一八三六）には二六件、この中には幕府の直轄地で軍事的要衝である甲斐一国をあげての大暴動——郡内騒動——が起っている。」と述べる。そして続いて翌八年の大坂での大塩平八郎の乱をあげて、その政治的意図と、幕府の軍事力の無力を天下に暴露した政治的效果とをもって、「政治史的に新しい段階を劃した事件であった。」と評価がなされていることが目を促えた。

大塩の乱と併記され、天保改革の直抗的契機となった「郡内騒動」とは、どのような事件であったのか。この究明を卒論のテーマとすることに決めたのであった。

(三)

卒業論文「天保七年甲斐郡内騒動について」は、一九五三年一月

完成して提出した。本文は約一〇〇枚(四〇〇字詰)地図・附表・註等を加えて一五〇枚近いものであった。

郡内騒動とは、天保七年(一八三六)に山梨県の東部郡内地域に起った一揆であったが、これが目的は救米を富有農民から借り入れることであり、国中とよばれる甲府方面に向出したことが発端であった。しかし、頭取であった中心人物の犬目村兵助・下和田村武七等の米借りも、笹子峠を越えて甲府盆地に入ると、打こわしへと進展し、甲府はもとより各地へと広がり、信州境にまで及ぶ大騒動となってしまうた。この打こわしに対し、甲斐を支配していた谷村・甲府・石和・市川大門など各代官所はもとより、甲府城警備にあたる甲府勤番もその鎮圧が不可能であった。このため幕府は、近隣の諏訪・高遠・沼津藩などに出兵を命じ、ようやく鎮圧することができたという大事件であった。

これ程の歴史的な大事件にもかかわらず、ほとんど研究らしい研究の行われていないというのが、当時の情況であった。遠山先生も甲斐での郡内騒動と書きながら、註に掲げた文献は僅かに一点、小野武夫『百姓一揆叢談』下冊所収「郡内騒動」のみであった。これは昭和二年(一九二七)に刊行されたが、郷土史家水上文淵により騒動記風に書かれたものであって、実証的な研究書ではなかった。したがって、何はともあれ先ず騒動の全様を明確にすることが求められた。

事件の全様を明らかにすると一言で言うことは容易であるが、小県とは言いながら山梨県全域に及ぶ村々が、天保七年八月二〇日から二五日にかけてその渦中にあつたのであり、村名一つとっても数百か村に関わるという大規模なものであった。村々がどこにあるの

かささ一々調べる毎日だったことを思い出す。それに加えて活字化された史料はほとんどなく、ほとんどが毛筆で和紙に書かれた生の文書を読まなくてはならない状態であった。

活字化された史料は、甲斐叢書(二)に収められた「甲騒落去」とこれに附録とされた「甲州一揆注進」のみと言うことであった。この「甲騒落去」の原本は、後に内閣文庫にあることがわかり、それと照合してみると、誤写や校正の誤りが多くあることがわかったが、一揆落着時の判決内容を記した文書で大いに利用させてもらった。また「甲州一揆注進」は、甲府代官井上十左衛門から幕府への報告書であり、大いに利用したが、甲州文庫(山梨県立図書館蔵)の写本と対比すると、誤植や脱落が目立つが、当時は役立つた。

文書も碌々読めない無学の学生が、自分の無力を泣々と思い知らされたのであるが、この労苦は予想以上の成果を与えてくれた。その第一は、山梨県全域の村々を対象にして奮闘した結果、この地域の全ての村々とその様子を知ったことであった。このことが、後々山梨をフィールドとして、研究を続ける基礎となった。そして後に、山梨県内の自治体史や山梨県史の編纂に関わることへと繋って来た。ちなみに以後関つた山梨県内の自治体史は、石和町誌・境川村史・甲府市史・都留市史・富士吉田市史などであり、山梨県史はなお進行中で、後数年は続くことである。

このことはさておいて、卒論の成果は自身満足の出来るものではなかった。一言でもってすれば、騒動の発生からその終末に至る事件の経過を、時間を追って明らかにするに止り、その歴史的意義を明らかにするまで至らなかった。そのため以後も機会ある度に研究の深化を心掛けた。しかし、大学を卒えて高校に就職して教師の道

を歩みはじめると、日常の雑務や教師としての仕事を優先しなくてはならず、研究の進展は意のままにならなかった。そこで思い切りよく仕事を捨て、大学院へ進んだ。

一九五八年東京都立大学大学院に進んだのは、遠山先生とも親しく、すでに一九四八年には「百姓一揆論」を「新日本史講座 1」として、中央公論社から出されていた北島正元先生の御指導を受けたためであった。その頃北島先生は新潟大学から都立大学に移られ、近世史研究の第一人者として高く評価されていた。そのため、都立大学には先生の名声を慕って、力のある学生が多く集って来ていた。したがって北島ゼミは活気と刺戟に満ち、若い学生の人気の的となっていたのであった。

都立大学の修士論文は「天保期甲斐の政治動向」と題し、郡内騒動の研究を更に深化し、一国天領として幕府の直接支配地である甲斐における天保期の政治動向について論じたものであった。言うまでもなく郡内騒動による動揺は、翌年二月の大坂での大塩の乱と深く関わるものであり、それが天保改革——明治維新への政治史的に新しい段階を劃する事件であった、とする遠山先生の視点を継承するものであった。

この論文中で直接言及はしなかったが、郡内騒動の中心人物の一人、犬目村兵助について調査し、その人物像を明らかにすることができたことは、大きな成果であった。特に兵助に関しては、天保七年八月の騒動直後の逃亡中の旅日記を発見し、これを発表したこと、学界に大きな一石を投じることとなった。この旅日記が縁となつて、兵助の妻の実家から、兵助の一揆参加前後に関する数点の文書も発見する幸運に恵まれたのも、今にして思えば、研究冥利に尽

きることであった。これらの点は、「文芸論叢」三二号中に「史料——人との邂逅——」という小文に記したので御覧いただければ幸いです。

四

犬目村兵助に関する調査は、その後の研究生生活に大きな変化を生むこととなった。近世の犬目村は、現在山梨県の東端上野原町犬目であり、中央高速道路「談合坂サービスエリア」北側の山村である。ここは近世甲州道中犬目宿のあったところであり、兵助は犬目村役人であったと同時に犬目宿役人でもあった。したがって犬目村での兵助の調査は、犬目宿での兵助についての調査でもあった。旧犬目宿本陣岡部家文書を通して兵助を調べていく中で、犬目宿への関心が深まっていった。他方、兵助の旅日記は、旅を通して逃亡生活を可能にした要因について考えることとなり、宿場や旅——交通・運輸などへの関心を深めることとなった。明治維新や百姓一揆などに對する従来の関心がさらに発展し、新たな関心に向いはじめていた。

そんな犬目宿の調査をまとめた論文が「近由宿駅の構造——甲州街道犬目宿について——」（立正女子大学短期大学部紀要第一六集）であった。これは、交通・運輸に関する最初の論文であったが、近世宿駅としての犬目宿の変遷は当然のことながら、明治維新を契機とする近世宿駅の廃止の問題を避けて通るわけには行かない。明治維新が宿駅制の解体をどのようにして進め、新しい交通・運輸制を生みだしていったかと言う新たな関心を生んだのであった。その結果短期大学部紀要に一九七二年以後連年にわたり山梨県下での交通・運輸に関し、明治維新期の問題に関する論文投稿を行った。それを

列記すると次のようである。

- 「近世宿駅の構造——甲州街道大目宿について」 紀要第一六集（七二年）
「山梨県下陸運会社の設立」 紀要第一七集（七三年）
「甲斐国中馬会社の創業について」 紀要第一八集（七四年）
「甲斐国中馬会社の発展について」 紀要第一九集（七五年）
「富士川運輸会社の創業について」 紀要第二〇集（七六年）
「富士川運輸会社の発展について」 紀要第二一集（七七年）
「蒲原新水道の建築と経営について」 紀要第二二集（七八年）
「蒲原新水道の建築と経営について」 紀要第二三集（七九年）
「明治維新时期における宿駅制度の諸問題」 紀要第二四集（八〇年）
「明治維新时期における宿駅制度の諸問題」 紀要第二五集（八一年）
「明治維新时期における宿駅制度の諸問題」 紀要第二七集（八三年）
「陸運元会社における継立機構の整備」 紀要第三〇集（八六年）
「明治期における運河開削と技術」 紀要第三二集（八八年）
遠山茂樹「明治維新」によって触発された関心は、郡内騒動をはじめとする百姓一揆への研究から近世村落の研究を経て、明治維新时期の交通・運輸の研究へと大きく発展して来た。しかし、決してこの間を段階を追って順序正しく変って来たわけではない。例えば、一方で「富士川運輸会社」に関する論文を書きながら、他方では「大目村兵助」あるいは「天保飢饉における夫食拝借について——甲州郡内領諸村を中心に——」（『地方史研究』No.157）を書くという具合であった。しかし、概して言えば、国連大学の「人間と社会の開発プログラム」での研究報告等では、殖産興業政策と交通・運輸問題への関心を強めた。そして、近代交通・運輸（傾斜）、共

著で「交通運輸の発達と技術革新」（東大出版）を出すなどのこともあった。

このようにして、近代と関わりながらも、自治体史の編さんで近代を取扱ったものは、取手市史のみであり、先述した石和町誌・境川村史・甲府市史・都留市史・富士吉田市史及び山梨県史にあっては、いずれも近世史の専門委員として史料編・通史編共に編さんと執筆に関わって今日に至っている。

(五)

一九五一年、遠山茂樹「明治維新」との出会いによって始めた歴史学研究は、様々な方面にわたり発展して今日に至った。考えて見れば、最初に書いたように、遺伝学研究を夢想した少年の思いは、たちまち変じて歴史へと向い、以来五〇年の日月を重ねてここまで来た。思えば長いようでもた短い、短いようでも長い過程であったと思うが、一つの事を育てることの出来たことは、何にも代え難い幸せに違いない。この辺で最後のまとめが必要なのだろうかと自問することがある。しかし、思いのままに、様々の方向に思考を發展させ、色々な問題に関心を広げて、その間を自由に縦横に往来して終るのも、また楽しい限りだと思えもする。

だがさてよ、物事の動機を大切にして、それを發展させることの本質があるならば、それなりのまとめと結末が、やはり必要なのではないか。

あなた方は、その点どのように考えて、この先生きて行かれるのでしょうか。私の拙い経験がもしお役に立つようなことが少しでもあったら、この上もない喜びです。